

日本発ウィーン便り～黄金の響き

あのホールの子の響きを聞きたくなくて、久々にウィーンで Konzert(コンツェルト:音楽会)にいつてきました。

このところ、オペラばかりでしたが、実は「初心者だけど一回ウィーンでクラシックを聞いてみたい」人には音楽会がお勧めです。理由は言葉が分からなくても大丈夫。そして音楽会だとどれだけ長いものでも2時間くらいです。(オペラだと一番短いものでも2時間以上)、加えてオペラに比べると、チケットはかなり安い!です。

そして、ウィーンには、どこにも代えがたいこのホールがあります。



ウィーンフィルの本拠地、そして元旦のニューイヤーコンサートでおなじみの Musikverein(ムズィークフェライン:楽友協会)のホールです。実はこの建物の中にはホールがいくつかあります。ニューイヤーコンサートで有名なホールは「黄金の間」なんてよく言われますが、実際は Großer Saal(グローサー・ザール:大ホール)っていうシンプルな名前です。このホールはウィーンフィルなど、オーケストラの音楽会に使われます。座席数は立ち見も入れて2000くらい。そしてちょっと小さいホールは Brahms-Saal(ブラームス・ザール:ブラームスホール)、小さいといっても600も座席があります。ここは室内楽などに使われます。あと、この数年大改装をしていると思ったら、いつの間にか、小さなホールがさらに5つくらいできたようですよ。(全て音楽専用です。)

今回は Brahms-Saal に、室内楽を聴きに行ってきました。このホールは初めてだったのですが、ここもしっかり「黄金の間」でしたよ。



開演前、2階からの風景。なかなかステキです。



柱だって手抜き(?)せず、こんな具合です。

このホールが出来たのが1870年(大ホールも同じ)。初めて演奏したのがクララ・シューマンだったそうです。ブラームスと縁の深いホールで、彼自身もここで演奏したし、彼の作品の多くがここで初演されたそうです。(だからブラームスホールなんですね)その後1993年にいったんこのホールは修復されています。修復当時のあるウィーンの新聞に「地球上でもっとも美しく、もっとも豪華で、もっとも晴れがましい室内楽ホールである」という言葉があったそうですよ。この言葉はホールの見た目だけではなく、ここの「音」についてもそっくりそのまま当てはまると思います。大ホールもそうですが、(なかなか違いを表現することが難しいですが)明らかに他のホールとは違う「音」です。うん、やはり「黄金の響き」でしょうか。

ハイテクを駆使した音楽ホールではなく、1870年完成ということで、今でもその謎というか秘密を解き明かそうと研究が進められているようですが、つまるところ「ある程度は純粋な幸運というほかない」ということになっているのが、なんだかこれまた、いい感じです。☺

ウィーンフィルをはじめ、世界のトップレベルのオーケストラの演奏は日本でも聞くことはできます。が、100%のオーケストラの力を120%に引き出すのが、こういったホールの力なんだと思います。国立歌劇場とちがって、こちらは協会のホールなので、毎日演奏会があるわけではないですが、もし日程が合えば、この「黄金の響き」を是非ご自身で体験してみてください！(ちなみに、国営の歌劇場では、案内の人たちが英語やその他の外国語を話すけど、楽友協会ホールでは英語が分っても絶対ドイツ語しか話さない、という本当かウソか分らないジョークがあります。☺)

ステキな音楽会のあとはいつものカフェで、



余韻に浸りながら、Heisse Schokolade mit Schlagobers
(ハイセ ショコラーデ ミット シュラークオーバース:ホットチョコレートのホイップクリーム乗せ)
ついてくるお水はウィーン名物、「おいしい水道水」です。



夜 10 時ごろの大通りの風景。まだまだたくさんの人でにぎわっています。



やっと修復が終わって塔が見えるようになったシュテファン大聖堂の夜の風景。
ウィーン編、続く。(かな?)